

評価とハイテク (8)

質と量

職場の安全管理や、食品などの製造過程の衛生管理などにも点検項目を網羅した表があり、責任者がそれにチェックをしてゆくシステムがあります。自動車学校の検定試験では車庫入れやサイド合わせというような、行程ごとに厳しいチェック項目が設定されています。これらのチェック方法はすべて「絶対評価」と呼ばれ、今の20代後半以前の世代は経験しなかった評価システムとして今日の学校教育では行われています。昔から入学試験は絶対評価であったにも拘わらず、学校現場では悪しき民主主義や平等主義の結果、学校やクラスあるいは教師の担当する集団ごとに【ノーマルカーブ】と呼ばれる正規分布の比率に基づいて5段階評価などが行われてきたのです。しかし、現実の問題として学校間の格差や地域格差などで同じ内申点でも同じ能力を有する訳でないことは誰でも知っていることです。人間の平等や公平さを維持する義務教育システムではこの問題に長年目をつぶってきましたが、もうきれいな事では済まない理想主義の破綻が目前です。

元々かけがえのない、つまり欠けたら代わりがない存在としてこの世に生まれてきた我々は、能力に差異があることを前提とした個性を伸ばすことが大切なのです。何万枚プレスしても同じ演奏になるCDのようなものではなく、1枚ごとに個性のある演奏をする人生を目指し、それでいて反社会的であったり、反道徳的な人生を送らないように方向付ける「教育」も要求されてきたのです。時の為政者にとっては個性的な国民よりも、どこかの国のように一糸乱れぬマスゲームが得意な国民の方がコントロールしやすいでしょうが、単一の価値観だけを押しつけ、長続した国家は歴史的にみてもありません。

今この国は【ゆとり教育】で失った「学力」を取り返そうと必死です。おバカが売り物になるテレビのクイズ番組がその象徴ともいえますが、「こんなバカでも個性として楽しくやっていける」というアピールにも見えますし、「自分より（と同じ）バカがいる」という安心感を提供しているともいえます。「知は力なり」とフランシス・ベーコンが言ったそうですが、今の日本はその力を取り戻すべく回帰しつつあります。主要教科に対し音楽科はますます【不要教科】へとその時間数削減に協力させら

れ、まもなく小学校でも選択教科になりそうな気配です。

高齢化が進み、生涯学習が新しい音楽科の生き残れるエリアになりそうですが、学習というのは2つの側面があり、1つは幼児や青少年にみられる「昨日できなかったことが今日できるようになる」とか「もっとできるようになる」という変容を促進する側面と、「まだこれができる」「こうすればまだできる」という能力の変容を抑止する側面です。前者が若者の学習で後者が高齢者の学習のように捉えられがちですが、音楽学習に関していうならば、あまりに高いその目標のために「簡易楽器」や「調号を減らす」「テンポを落とす」「キーを下げる」「パートを減らす」「音域を狭く」などの高齢者向きのような教育が導入期の教育で定着し、前途に展望が見えない実際の音楽とは距離のある教材や教育内容が殆どです。このことは小学校の低学年では音楽科は一番人気の教科なのに、6年生ではそれが逆転し、一番不人気の教科になってしまうことと関係があるように思われます。

ドイツの中学校の授業を参観したり、実際に参加したことがあります。【持てる能力を発揮させる】ことに主眼をおいた授業では、画一的な強制や教材展開を排しそれぞれの生徒の得意な技や感性がさらに伸ばされていると実感しました。当然ドイツでは音楽は中学においても（選択制であるにしても）人気の高い教科です。教えにくいからとか難しいからといって円周率を「3」にしてしまうようなゆとり教育は、音楽科では調号を#b一つだけにしたり、ハ調読みを主流にするような安易さに流れ、最後の調号の#はシと読み直す、最後のbはファに変わるという原理を教えないで単に数を単純化するという安易なゆとりが「おバカ」を製造してきたことに気がついてほしい。必修曲を減らすなどの量の削減も質の低下を招いたかもしれません。

教育の質と量は、あるバランスが必要なのであって、どちらかが大切であるという言い方はできないと思います。評価の世界ではこの質で評価する考え方と、量で評価する考え方があります。また、クレペリン検査のように量で質を測定する方法もあります。関西の有名なKピアノ塾では音符を書いたフラッシュカードを一瞬見せてその音をピアノで鳴らす訓練を昔から行っていますが、この方法は確かに読譜力には貢献しているように見え

すが、多くの場合楽譜には前後関係の文脈が存在し、単独で無関係な音符が連続しているわけではないので、どちらかといえば文脈を読む能力の方が質が高いように思えます。下の表はいろいろな評価法とその方法がどんな音楽能力の評価に適しているかをまとめたものです。学校現場のテストでは殆どの場合はペーパーテストに頼らざるを得ませんが、何をどのくらい知っているかという知識面に偏る嫌いがあり、下手をすれば知識だけの【音学】的能力になってしまうおそれもあります。この表は丁度真ん中あたりから上と下が違う傾向になっています。これは、ともすれば見落としがちになる【可能性】の能力についても探る方法があることを下半分で強調したためにそうになりました。

例えば【意欲】というものについて意欲的であることが望ましいという前提で、どう評価したらよいでしょう。私は意欲という能力は次の5つの行動に観られると考えています。

- ①楽しむ
- ②工夫する
- ③冒険する
- ④助け合う
- ⑤耐える

これら5つの行動を「観察法」「SD法」で量化することで、本来質であった意欲という因子を量化して評価に結びつけることができるのではないかと考えています。このように意欲という言葉一つをとってみても、今までは「雰囲気」「結果」からしか判断できなかったのに対して、意欲が行動の【動員】や【誘因】などになって上の5つの行

動が起こっていると考えるわけです。ですから現実的な行動の裏にかくれる能力（ハルの式を思い出してください）を量として取り出す一つの参考です。

このように、精密で公正な評価を積み重ねれば次第に生徒のプロフィールが鮮明になり、適切な指導内容と指導法が明らかになってくるはずですが。しかし、教師の目も耳も2つ、口は1つ、手は2本。同時多発の子供たちの活動を正確に観察したり、チェックするためには、従来の一斉授業では限界があり、一糸乱れぬどこかの国のマスメディアのような授業になりがちです。私は先生方に次のいくつかの思いついた提案をします。

- ・全体を評価する方法で個人を評価しない
- ・評価する方法を念頭において指導計画を練る
- ・マークカードやレスポンスアナライザーのような方法も個人を診る手段として考える
- ・彼らが何を評価されたがっているかをまず知ること
- ・情報は正しいデータから形成する
- ・データは情報ではなく情報の一部であることを知る
- ・コンピュータを成績処理にしか使わないのではなく、教材提示装置との連動（プレゼンテーション）や機器のコントローラとしても使う
- ・同時多発の生徒からの入力データをデータ化してさらに複数のデータと組み合わせて情報化する
- ・100枚のCDよりも1回の生演奏の方がインパクトが大きいと信じて極力生演奏を提供する
- ・質と量の関係を教材や教育内容に（何をどのくらい）
- ・メカやコンピュータに弱いと言わない（教師自身が左の5つの意欲行動を実践する）

音楽能力評価の視点 評価の方法			現実的な能力		可能性を秘めた能力	
			要素的な知識 (音・音程・音階など)	事実的知識 (和声・旋律・リズム 音楽史など)	適性・興味・ 意欲・関心など	創造性・個性 総合力・哲学 美学など
ペーパーテスト	客観テスト	選択肢法	◎	◎	○	
		組み合わせ法	○	○		
		単純再生法	○	○		
		完成法	○	○		
		配列法	△	△		
		訂正法	○	○		
	論文体テスト					○
	問題解決テスト					△
	拡散型テスト	オープンエンドテスト			○	○
		イメージマップ			○	◎
		グルーピングテスト		◎	◎	◎
実音		聴き取りテスト	◎	◎	◎	◎
実技		実技テスト	◎	◎	◎	◎
作品	作品法	日記・感想			○	○
		制作物			○	○
観察面接	観察法	チェックリスト法	△	△	○	○
		評定尺度法	△	△	◎	◎
		カテゴリー法			○	○
自己診断	SD法				◎	◎
	質問紙法				○	○

◎＝最適 ○＝良 △＝やや効果 空白＝不適